



羅針盤

古川 福実
Fukumi Furukawa

和歌山県立医科大学皮膚科 教授
Visual Dermatology 編集協力者



自己探しの旅路

「自己とはなにか」という問いかけは、きわめて哲学的雰囲気満ちたものである。医師となって39年の個人歴をたどると、大学院時代の学位のテーマ self recognition の研究がその問いかけの端緒で、かっこええテーマやな!と思ったものである。かなり頑張っ、ようやく「同系あるいは同種胸腺を移植したヌードマウスの免疫異常の解析」という学位論文が完成した。その後、自己免疫疾患の皮膚病変の病態と治療に関する研究に進んでくうちに、研究対象は必然的に純系マウスから、きわめてヘテロなヒトに変わってきた。問いかけに応えるどころか、魔界のようなテーマだなど思いはじめた。そのうち、学位論文が掲載された *Thymus* という雑誌が消えた(廃刊らしい)ことを知り、愕然、呆然、自己喪失状態になってしまった。このテーマは縁起が悪いし、むずかしいから中止と決断して、浜松医科大学から和歌山県立医科大学に移ったのが1999年である。

ところが、紀州に来て遭遇したのが中條-西村症候群であった。大阪の南から和歌山にかけて、特徴ある皮膚および全身性の病態を示す疾患が知られていた。その遺伝性に注目したのが、和歌山県立医科大学皮膚科初代教授 西村長応で、66年以上前のことである。その疾患は、乳幼児期に凍瘡様皮疹で発症し、弛張熱や結節性紅斑様皮疹を伴い、次第に顔面・上肢を中心とした上半身のやせと拘縮を伴う長く節くれ立った指趾が明らかになる特異な遺伝性炎症・消耗性疾患である。経過中、抗DNA抗体が出現する事が多く、炎症と免疫の二面性を有した

稀な疾患である。先天的なプロテアソーム機能不全によって本症が引き起こされるのだが、広義の自己炎症症候群に含まれるのか否かについては疑義もあろう。重要なことは本症のメカニズムを明らかにすることにより免疫学と炎症をリンクさせる可能性があるということである。自己免疫が獲得免疫の異常で自己炎症が自然免疫の異常と考えることもできるが、中條-西村症候群は自己の多様性を示唆しているにちがいない。

美容皮膚科学に初めて接したのも紀州であるが、携ってみるとかなり面白い。ケミカルピーリングから始まり、化粧品、レーザー治療、カモフラージュと、EBMレベルを担保した皮膚科診療への導入が面白く、興味津々といったところである。なぜ、ヒトは美を求めるのか? 健やかな肌を求めるのか? それは他人からの目を意識するからではないようだ。結局は、自己の確立あるいは存在感の確認作業だと思ふようになった。一方で、自己の確立ひいては同系あるいは同種を求めるうちに、ヒトは群れをなしていく。群れを抜けようとすれば、区別や差別に繋がる。これも10数年間、学生諸君とハンセン病をテーマとした人権の学習から得たことである。

自己は変貌した方がいい。多様性がある方がいい。案外、免疫学の自己とはそんなものかもしれない。

最後に、退職記念特集号の責任編集を提案して下さった本誌編集委員の江藤隆史先生、お忙しい中興味深い原稿を寄せて下さった先生がた、学研メディカル秀潤社 編集部松塚 愛氏に感謝します。